

氏名（本籍）	松 井 泰 二（東 京 都）			
学位の種類	博士（コーチング学）			
学位記番号	博甲第 7076 号			
学位授与年月日	平成26年 3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	バレーボールにおけるブロックパフォーマンスの改善に関する研究 ～遂行過程と状況別パフォーマンスに着目して～			
主査	筑波大学教授	博士（学術）	山 田 幸 雄	
副査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	會 田 宏	
副査	筑波大学教授	博士（体育科学）	凶 子 浩 二	
副査	筑波大学教授	博士（工学）	高 木 英 樹	

## 論 文 の 要 旨

### <目的>

現在のバレーボールでは、アタック攻撃に対処するブロック技術の重要性が指摘されている。ブロックの成否が試合の結果を左右するともいわれている。そこで、本研究では、バレーボールにおける大学男子プレイヤーのブロックパフォーマンスを改善するための方策を検討しようとするものである。そのために、ブロックの準備局面である遂行過程に着目し、その構成要素を明らかにしようとするものである。そして、大学生男子プレイヤーと日本トップリーグプレイヤーについて、ブロック遂行過程における構成要素とゲーム局面、相手攻撃局面との関連性を明らかにし、大学生男子プレイヤーの修正すべき課題を明らかにしようとするものである。そこから、ブロックにおける修正すべき課題を解決するための学習プログラムを作成し、その成果の検証を行うことであった。

### <対象と方法>

本研究では、4つの研究課題を設定した。

研究課題1では、国内男子トップリーグチームに所属する監督、コーチおよびアナリスト6名を対象に、ブロックにおける遂行課程の構成要素に関する調査をデルファイ法を用いて行った。

研究課題2-1では、ブロック遂行過程における6項目の構成要素について、国内男子トップリーグチームに所属する48名を対象にして、実際のゲーム中に行われているブロックパフォーマンスについて分析を行った。

研究課題2-2では、A大学男子プレイヤーを対象にして、「ゲーム局面」と「攻撃テンポ」の異なった状況下において、ブロック遂行過程の重視すべき構成要素について分析を行った。さらに、国内男子トップリーグチームに所属するプレイヤーと比較することにより、A大学男子プレイヤーの修正すべき課題について検討した。

研究課題2-3では、A大学男子プレイヤーにおいてブロックパフォーマンスを改善するための学習プログラムを構築し、プログラムの実践を通して有用性を検証した。

## <結果>

研究課題 1. バレーボールのブロック遂行過程における構成要素は、基本の位置取り、ブロックの構え、ブロックの実行人数、アタックエリアでの待機の早さ、アタッカーへの近づき、ブロックの高さの6項目が示された。

研究課題 2-1. 貢献群と非貢献群では、「ゲーム局面」と「攻撃テンポ」の違いにより重視すべき構成要素に違いが認められた。それらは、レセプション・アタックに対するブロック局面ではブロックの構え、ブロックの実行人数、アタックエリアでの待機の早さ、ブロックの高さであった。さらに、相手攻撃が 1st テンポの場合はアタックエリアでの待機の早さ、ブロックの高さにおいて、2nd テンポの場合はブロックの構え、アタックエリアでの待機の早さ、ブロックの高さにおいて、3rd テンポの場合はブロックの構え、ブロックの高さにおいて違いが認められた。

研究課題 2-2. レセプション・アタックに対するブロック局面において、相手攻撃が 1st テンポの場合はブロックの高さが、2nd テンポの場合は基本の位置取りとブロックの高さについて有意な差が認められた。さらに修正課題として、相手攻撃が 1st テンポの場合はアタックエリアでの待機の早さが、2nd テンポの場合はブロックの構え、アタックエリアでの待機の早さが、3rd テンポの場合はブロックの構えとブロックの高さが修正すべき課題であることが明らかになった。また、ディグ・アタックに対するブロック局面では、相手攻撃が 1st テンポの場合はアタックエリアでの待機の早さとブロックの高さが、2nd テンポの場合はブロックの実行人数とブロックの高さが修正すべき課題であることが明らかになった。

研究課題 2-3. レセプション・アタックに対するブロック局面における 5 項目の修正すべき課題の内 4 項目において有意な変化が、ディグ・アタックに対するブロック局面における 4 項目の修正すべき課題の内 2 項目において有意な変化が認められた。それらは、レセプション・アタックに対する相手攻撃が 2nd テンポの場合のブロックの構えとアタックエリアでの待機の早さ、相手攻撃が 3rd テンポの場合のブロックの構えとブロックの高さで、ディグ・アタック局面に対する相手攻撃の 1st テンポの場合のアタックエリアでの待機の早さ、2nd テンポの場合のブロックの高さにおいて有意な変化が認められた。

## <考察>

バレーボールにおけるブロックパフォーマンスの改善の方策として、これまで行われてきたアタック前後の主要局面に焦点を当てるのではなく、準備局面である遂行過程に着目することの必要性を提唱したもので新たな試みといえる。そして、ブロックの遂行過程における構成要素を明らかにし、ゲーム局面や相手の攻撃テンポとの関連性を明確に示したものとイえる。そこから、ゲーム局面や相手の攻撃のテンポによってプレーヤーがブロックを行う際に修正すべき課題が異なることを初めて示した研究であり、これはブロックの指導に新たな切り口を開いたものと考えられる。さらに、修正すべき課題に対する学習プログラムを構築し、その有用性を明らかにしたことは、バレーボールにおける今後のブロックスキルの発展に寄与できる新たな一面を示したものと考えられる。これらの結果は、様々なレベルに応用可能であり、更なる発展性を持つ研究であるといえる。

本研究は、バレーボールにおいて、常に得失点に絡み、難しい技術とされてきたブロックに焦点をあてたものである。ブロックパフォーマンスの準備局面である遂行過程に焦点を当て、これまで明らかでなかった構成要素を明らかにし、そこからブロックにおける修正すべき課題を抽出するというこれまで行われてこなかった新たな視点でバレーボール研究に取り組んだという点で高く評価できる。今後はさらに、様々なレベル、対象領域を広げ、ブロックパフォーマンス学習のプログラムの一般化の確立へと向かうことが期待される。

平成 26 年 2 月 28 日、博士（コーチング学）学位論文審査委員会において審査委員全員出席のもと最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った結果、審査委員全員によって合格と判定された。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。